

親の心配について

親というものは、子どもを心配することは普通であり当然のことなのです。何を隠そう自分も、成人した子どもに心配をすることがあります。もちろん、子どもはうるさく感じ、心の中では「余計な心配をして」と思っているに違いありません。それでも子どもを心配するのが、親という生き物なのです。子育てには、いつでも心配がつきまといきます。本当の心配もあれば、余計な心配ということもあるに違いありません。「余計な心配をして」と言えない小さな子どもでは、どう考えたらよいのでしょうか。

心配の程度は経験によって変わることを、皆さんもよくご存知だと思います。初めてのお子さんの時には鼻水だけで心配したのに、二人三人目になれば鼻水を流しっぱなしでも心配しなくなるものです。熱性けいれんも同じで、初めての場合は親が卒倒するほど心配するのですが、慣れてくれば「夕べ、ひきつつけちゃいました」とあっさり言ってしまうのです。皆知らず知らずのうちに、経験によって様々なことを学んでいきます。

例を挙げたことは、経験による学習のたまものです。

お子さんが病気になることで親御さんが心配するということは、「一つ一つが勉強」と考えられるといでしょう。特に初めて出会う病気として多い突発性発疹症は、対処法や考え方が学べるチャンスなので「神様が与えてくれた教科書」と呼ばれることがあります。このような経験を積むことによって、親御さんも心配が少なくなっていくのです。

さて心配性の親と楽天家の親、どちらがよいのでしょうか。子どもにとっては心配性の親の方が、間違いが少ないはずですが、「肺炎を心配して早めに受診したのが風邪だった」、「しばらく風邪と軽くみていたのが肺炎だった」。前者の方が、子どもにとつての負担が少ないだけでなく、結果として許されることだと思いません。後者の場合は、辛い思いが長く続いただけでなく、入院ともなれば後悔も大きいはずですが、いつまでも同じ心配を繰り返すのでは、せつ々かの経験が活きてきません。病気に限らず子育てでは、学習効果が上がっ

ていかなければ、経験も無駄になってしまいます。

言葉や表現が上手く出来ない子どもでは、気持ちを読み取ってあげることも必要となります。例えば、心配性の親御さんは状況に関係なく、いつも栄養を心配します。高い熱や具合が悪い時でも、子どもというものは食欲が無いといけないと思つていきます。自分では具合が悪ければ食欲が落ちると知っているのに、子どもは食べなければならぬと思つてしまふのです。体調が悪い時に食欲が無くなるのは、見方を変えれば「負担を少なくしなさい」という身体からの指令とも考えられます。それにもかかわらず、親の勝手な心配のために無理やり食べさせられる子どもの気持ちはどうでしょう。極端なことを言えば、ひよつとしたらこれも虐待のうちに入るかも知れませんが、心配性の親御さんは、問題点がいくつもある場合、これを優先したらいいかが見えてこないのです。

どんなお母さんのタイプが理想的なのでしょう。始めは心配性で構いませんが、経験を積んで学習し、早

小児科専門医

Profile 川村和久

【かわむら・かずひさ】仙台市在住
医療法人社団かわむらこどもクリニック院長。日本一の小児科サイトを運営する、言わずと知れた小児科専門医。「お母さん達の心配・不安の解消」を理念に、日々の診察にあたっている。宮城県小児科医会理事。2001年には医師として大変名譽のある日本小児科学会パネリストとして選ばれる。
*2008年4月号「ひよこクラブ」
「小さく生まれた赤ちゃん5人のすくすく成長日記」のコーナーを監修し、疑問や悩みに応えたとともにメッセージを掲載。
<http://www.kadomo-clinic.or.jp/>



く楽天家のお母さんになれるように努力しましょう。気楽に考えることが出来るようになれば、お母さんのストレスも減り、結果的に子どもも伸び伸びと育つに違いありません。子育てを楽しむには、早く育児の楽天家になれるかどうかではないでしょうか。